

# 太郎坊

幸田露伴

青空文庫



見るさえまばゆかった雲の峰は風に吹き崩されて夕方の空が青  
 みわたると、真夏とはいいながらお日様の傾くに連れてさすがに  
 凌ぎよくなる。やがて五日頃の月は葉桜の繁みから薄く光つて  
 見える、その下を蝙蝠が得たり顔にひらひらとかなたこなたへ  
 飛んでいる。

主人は甲斐甲斐しくはだし尻端折で庭に下り立って、蟬も雀  
 も濡れよとばかりに打水をしている。丈夫づくりの薄禿の  
 男ではあるが、その余念のない顔付はおだやかな波を額に湛えて、  
 今は充分世故に長けた身のもはや何事にも軽々しくは動か  
 されぬというようなありさまを見せている。



足を洗つて下駄げだをはくかとおもうとすぐに下女よを呼んで、手拭てぬぐい、石鹼シヤボン、湯銭等を取り来らしめて湯へいってしまった。返つて来ればチャンと膳立ぜんだてが出来ているというのが、毎日毎日版すに摺すつたように定きまつている寸法と見える。

やがて主人はまくり手でをしながら茹蛸ゆでだこのようになって帰つて来た。縁はなごぎに花塵しが敷いてある、提煙草盆さげたばこぼんが出てゐる。ゆつたりと坐すわつて烟草たばこを二三服ふかしているうちに、黒塗くろぬりの膳ぜんは主人の前に据すえられた。水色の天具帖てんぐじょうで張られた籠洋燈かごランプは坐敷ざしきの中に置かれてゐる。ほどよい位置つるに吊された岐阜提灯ぎふちようちんは涼すずしげな光りを放つてゐる。

庭ひとすみは一隅あおぎりの梧桐あおぎりの繁みから次第に暮れて来て、ひよろ松檜まつひ

葉などに滴る水珠は夕立の後かと思紛うばかりで、その濡色に夕月の光の薄く映ずるのは何とも云えぬすがすがしさを添えている。主人は庭を渡る微風に袂を吹かせながら、おのれの労働が為り出した快い結果を極めて満足しながら味わっている。

ところへ細君は小形の出雲焼の爛徳利を持って来た。主人に対して坐つて、一つ酌をしながら微笑を浮べて、

「さぞお疲労でしたらう。」

と云つたその言葉は極めて簡単であつたが、打水の涼しげな庭の景色を見て感謝の意を含めたような口調であつた。主人はさも甘そうに一口啜つて猪口を下に置き、

「何、疲労するといふまでのことも無いのさ。かえつて程好い運



たのに、ちよつと細君の心の味が見えていた。主人は箸を下して後、再び猪口を取り上げた。

「アア、酒も好き、下物も好き、お酌はお前だし、天下泰平という訳だな。アハハハハ。だがご馳走はこれつきりかな。」

「オホホ、厭ですネエ、お戯謔なすつては。今鳴焼を拵えてあげます。」

と細君は主人が斜ならず機嫌のよいので自分も同じく胸が闊々とするのでもあろうか、極めて快活に気軽に答えた。多少は主人の気風に同化されているらしく見えた。

そこで細君は、

「ちよつとご免なさい。」

と云つて座を立つて退いたが、やがて鳴焼を持って来た。主人は熱いところに一箸つけて、

「豪気豪気。」

と賞翫しょうがんした。

「もういいからお前もそこで御飯ごぜんを食べるがいい。」

と主人は陶然とうぜんとした容子ようすで細君の労を謝して勧めた。

「はい、有り難う。」

と手短に答えたが、思わず主人の顔を見て細君はうち微笑ほほえみつつ、

「どうも大層いいお色におなりなさいましたね、まあ、まるで金

太郎のようで。」

と真しんに可笑おかしそうに云つた。

「そうか。湯が平生いっもに無く熱かつたからナ、それで特別に利いたかも知れない。ハハハハ。」

と笑つた主人は、真にはや大分とろりとしていた。が、酒さけのみこ呑根んじょう

性せいで、今一盃と云わぬばかりに、猪口の底に少しばかり残つていた酒を一息に吸い乾してすぐとその猪口を細君の前に突き出した。その手はなんとなく危あやうげであつた。

細君が静かに酌をしようとしたとき、主人の手はやや顛ふるえて徳利の口ヘカチンと当つたが、いかなる機はずみ会か、猪口は主人の手をスルリと脱ぬけて縁に落ちた。はつと思つたが及ばない、見れば猪口は一つ跳おとつて下の靴くつぬぎ脱の石の上に打ぶ付つて、大おおきい片は三ツ四ツ小片ちいさいのは無数に碎くだけてしまった。これは日頃主人が非常に

愛あい 翫がん しておつた董花すみれの模様の着いた永樂えいらくの猪口で、太郎坊太  
 郎坊と主人が呼んでいたところのものであつた。アツとあきれて  
 夫婦はしばし無言のまま顔を見合せた。

今まで喜びに満されていたのに引換ひきかえて、大した出来ごとでは  
 ないが善いことがあつたようにも思われなからかして、主人は  
 快く酔ようていたがせつかくの酔よも興きも醒さめてしまったように、い  
 かにも残念らしく猪口の欠けを拾つてかれこれと継つぎ合せて見て  
 いた。そして、

「おれが醺よつていたものだから。」  
 と誰だれに對むかつて云うでも無く独ひとりごと 語ことのように主人は幾度いくども悔くやんだ。

細君はいいほどに主人を慰なぐさめながら立ち上つて、更に前より立た

ちまぎ  
優った美しい猪口を持って来て、

「さあ、さっぱりとお心持よく此盃これで飲あがつて、そしてお結局つもりになすつたがようございましょう。」

と慇懃まめやかに勧めた。が、主人はそれを顧みもせずやっぱり毀こわれた猪口の碎片かけらをじつと見ている。

細君は笑いながら、

「あなたにもお似合いなさらない、マアどうしたのです。そんなものは仕方がありませんから捨てておしまいなすつて、サアーツ新規に召し上れな。」

という。主人は一向言葉に乗らず、

「アア、どうも詰つままらないことをしたな。どうだろう、もう繼つげ

ないだろうか。」

となお未練みれんを云うている。

「そんなに細こまかく毀れてしまったのですから、もう継げますまい。どうも今更仕方はございませんから、諦あきらめておしまいなすつたがようございましたよ。」

という細君の言葉は差当つて理の当然なので、主人は落胆がっかりしたという調子で、

「アア諦めるよりほか仕方が無いかなア。アアアア、物の命数には限りがあるものだナア。」

と悵ちようぜん然たんとして嘆たんじた。

細君はいつにない主人が余りの未練さをやや訝いぶかりながら、

「あなたはまあどうなすつたのです、今日に限つて男らしくも無いじゃありませんか。いつぞやお鍋なべが伊万里いまりの刺身皿さしみざらの箱を落して、十人前そろちゃんと揃そろつていたものを、毀こわしたり傷物やぶものにしたり一ツも満足の物の無いようにしました時、傍そばで見えていらしつて、過失そそだから仕方がないわ、と笑つて済ましておしまいなすつたではありませんか。あの皿は古ふるびもあれば出来も佳よい品で、価値ねうちにすればその猪口ちがとは十倍も違ちがひますように、それすら何とも思わなないでお諦あきらめなすつたあなたが、なんだつてそんなに未練みれんらしいことを仰おつしやるのです。まあ一盃ひとつめ召めし上あれな、すつかり御酒ごしゆが醒さめておしまいなすつたようですね。」

と激はげまして慰なぐさめた。それでも主人はなんとなく気が進すすまぬらしか

つた。しかし妻の深切しんせつを無にすまいと思つてか、重々しげに猪口を取つて更に飲み始めた。けれども以前のように浮き立たない。「どうもやはり違つた猪口だと酒も甘くない、まあ止めて飯めしにしようか。」

とやはり大層沈しずんでいる。細君は余り未練すぎるとややたしなめるような調子で、

「もういい加減にお諦あきらめなさい。」  
ときつぱり言つた。

「ウム、諦めることは諦めるよ。だがの、別段未練を残すのなんのというではないが、茶人は茶碗ちやわんを大切だいじにする、飲酒家さけのみは猪口を秘蔵にするというのが、こりやあ人情だろうじやないか。」

「だって、今出してまいったのも同じ永楽ですよ。それに毀れた方はざつとした堇花すみれの模様で、焼も余りよくありませんが、こちらには中は金欄地きんらんじで外は青華せいかで、工手間くでまもかかっていれば出来もいいし、まあ永楽という中にもこれ等は極上ごくじょうという手だ、とご自分で仰おつしやつた事さえあるじゃあございせんか。」

「ウム、しかしこの猪口は買ったのだ。去年の暮におれが仲通の骨董店どうぐやで見つけて来たのだが、あの猪口は金銭おかしで買ったものじゃあないのだ。」

「ではどうなさつたのでございます。」

「ヤ、こりやあ詰らないことをうっかり饒舌しゃべつた。ハハハハハ。」  
と紛まぎらしかけたが、ふと目を挙あげて妻の方を見れば妻は無言で我

が面をじつと護まもっていた。主人もそれを見て無言になつてしばしは何か考えたが、やがて快活きやくな調子になつて、

「ハハハハハハ。」

と笑い出した。その面上にははや不快の雲は名残なごり無く吹き掃はらわれて、その眼まなこは晴やかに澄すんで見えた。この僅少わずかの間に主人はその心の傾かたむきを一転したと見えた。

「ハハハハ、云うてしまおう、云うてしまおう。一人で物をおもう事はないのだ、話して笑つてしまえばそれで済むのだ。」  
と何か一人で合点がてんした主人は、言葉さえおのずと活気を帯びて来た。

「ハハハハハ、お前を前に置いてはちと言いい苦にくい話だがナ。実は

あの猪口は、昔おれが若かつた時分、アア、今思えば古い、古い、アアもう二十年も前のことだ。おれが思っていた女があつたが、ハハハハ、どうもちツと馬鹿らしいようで真面目では話せないが。

と主人は一口飲んで、

「まあいいわ。これもマア、酒に酔つたこの場だけの坐興で、半分位も虚言を交せて談すことだと思つて聞いていてくれ。ハハハハハ。まだ考のさつぱり足りない、年のゆかない時分のことだ。今思えば真実に夢のようなことでまるで茫然とした事だが、まあその頃はおれの頭髮もこんなに禿げてはいなかつたらうというものだし、また色も少しは白かつたらうというものだ。何といつ

ても年が年だから今よりはまあ優<sup>ま</sup>しだつたろうさ、いや何もそう  
見つともなく無かつたからという訳ばかりでも無かつたろうが、  
とにかくある娘に思われたのだ。思えば思うという道理で、性<sup>しょう</sup>が  
合つたたでもいう事だつたが、先方<sup>さき</sup>でも深切にしてくれる、こつ  
ちでもやさしくする。いやらしい事などはちつとも口にしなかつ  
たが、胸と胸との談話<sup>はなし</sup>は通つて、どうかして一<sup>いっ</sup>緒<sup>しょ</sup>になりたい位  
の事は互<sup>たが</sup>いに思い思つていたのだ。ところがその娘の父に招<sup>よ</sup>ばれて  
遊びに行つた一日<sup>あるひ</sup>の事だつた、この盃で酒を出された。まだその  
時分は陶<sup>やきもの</sup>工の名なんぞ一ツだつて知つていた訳では無かつた  
が、ただ何となく気に入つたので切<sup>しきり</sup>とこの猪口を面<sup>おもしろ</sup>白<sup>しろ</sup>がると、  
その娘の父がおれに對<sup>むか</sup>つて、こう申しては失礼ですが此<sup>これ</sup>盃<sup>むか</sup>がおも

しろいとはお若いに似ずお目が高い、これは佳いものではないが  
了りようぜん全ぜんの作で、ざつとした中にもまんざらの下手へたが造つたもの  
とは異ちがうところもあるように思つていました、と悦よろこんで話した。  
そうすると傍そばに居た娘が口を添えて、大層お気に入つたご様子で  
すが、お気に召めしましたのは其それ盃ぐの仕合せというものでございま  
す、宜よろしゅうございますからお持帰も下さいまし、失礼しつれいでございま  
すけれど差上げとうございます、ねえお父様、進あ上げたつていい  
でしょう、と取りなしてくれました。もとより惜むほどの貴いもので  
はなし、差当あつての愛想あいそにはなる事だし、また可愛かわいがつている娘  
の言葉を他人ひとの前で挫くじきたくもなかつたからであらう、父おやは直ただちに  
娘の言葉に同意して、自分の膳ぜんにあつた小いのをも併あせて贈おくつて

くれた。その時老人の言葉に、すみれ董の事をば太郎坊次郎坊とい  
 まするから、この同じような董の絵の大小二ツの猪口の、大きい  
 方を太郎坊、小さい方を次郎坊などと呼んでおりましたが、一ツ  
 離はなして献あげるのも異なるものですから二つともに進こわじましよう、と  
 いうのでついに二つとも呉くれた。その一つが今壊こわれた太郎坊なの  
 だ。そこでおれは時々自分の家で飲む時には必らず今の太郎坊と、  
 太郎坊よりは小さかった次郎坊とを二ツならべて、その娘と相あいじ  
やく酌やくでもして飲むような心持で内ないない々々人知らぬ楽らくみをしていた。  
 またたまにはその娘に逢あった時、太郎坊があなたにお眼まなこにかかり  
 たいと申しおりました、などと云いつて戯たわむれたり、あの次郎坊が  
わたくし小生わたくしに對たいつて、早く元のご主人様のお嬢じようさま様さまにお逢あい申ました

いのですが、いつになれば朝夕お傍に居られるような運びになり  
 ましようかなぞと責め立てて困ります、と云つて紅い顔をさせ  
 たりして、ほんとう真実に罪のない楽しい日を送っていた。」  
 と古えの賤の芋環いにし おだまき繰り返して、さすがに今更こんじやく今昔の感に堪  
 えざるもののごとく我れと我が額に手を加えたが、すぐにその手  
 を伸して更に一盃を傾けた。

「そうこうするうち次郎坊の方をふとした過失そそうで毀してしまった。  
 アア、二箇揃ふたつついていたものをいかに過失とは云いながら一箇ひとつにし  
 てしまったが、ああ情無いことをしたものだ、もしやこれが前ぜんび  
 表ようとなつて二人が離ればなれになるような悲しい目を見るので  
 はあるまいかと、痛いたくその時は心を悩なやました。しかし年は若わかし勢

いは強い時分だったからすぐにまた思い返して、なんのなんの、心さえ慥たしかなら決してそんなことがあるはずはないと、ひそかに自みずから慰めていた。」

と云いかけて再び言葉を淀よどました。妻は興有りげに一心になつて聞いている。庭には梧桐を動かしてそよそよと渡わたる風が、ごくごく静せい穩おんな合の手を弾ひいている。

「頭がそろそろ禿げかかつてこんなになつてはおれも敵かなわない。過こ般ないだも宴えん会かいの席で頓とん狂きやうな雛おし妓やくめが、あなたのお頭つむり願りとかけてお恰かつ好こうの紅絹もみと解ときますよ、というから、その心はと聞いたら、地ちが透すいて赤く見えますと云つて笑い転ころげたが、そう云われたツて腹はらも立てないような年になつて、こんなことを云い出

しちやあ可笑いが、難儀なんぎをした旅行たびの談はなしと同じことで、今のこと  
じやあ無いからなにもかも笑つて済すむというものだ。で、マア、  
その娘もおれの所へ来るといふ覚悟かくご、おれも行末はその女と同いっし  
棲よになろうといふつもりだった。ところが世の中のお定まりで、  
思うようにはならぬ骰子さいの眼めという習いだから仕方が無い、どう  
してもこうしてもその女と別れなければならぬ、強いて情を張  
ればその娘のためにもなるまいといふ仕誼しぎに差懸さしかかった。今考え  
ても冷ひやりとするような突き詰めた考えも発おこさないでは無かつたが、  
待てよ、あわてるところで無い、と思案に思案して生きは生きた  
が、女とはとうとう別れてしまった。ああ、いつか次郎坊が毀れ  
た時もしやと取越とりこしぐらう苦勞をしたつけが、その通りになつたのは情

け無いと、太郎坊を見るにつけては幾度いくたびとなく人には見せぬ涙なみだを  
 こぼした。が、おれは男だ、おれは男だ、一いっ婦人つぷじんのため  
 に心を  
 労あつしていつまで泣こうかと思ひ返して、女々めめしい心を捨ててしき  
 りに男児おとこがつて諦めてしまった。しかし歳としが経たつても月が経つつて  
 も、どういふものか忘れられない。別れた頃の苦しきは次第次第  
 に忘れたが、ゆかしさはやはり太郎坊や次郎坊の言こと伝づつをして戯  
 れていたその時とちつとも変らず心に浮ぶ。氣に入らなかつたこ  
 とは皆みな忘れても、いいところは一つ残らず思ひ出す、未練とは悟さと  
 りながらも思ひ出す、どうしても忘れきつてしまうことは出来な  
 い。そうかと云つてその後はどういふ人に縁付いて、どこにその  
 娘がどう生活くちしているかということも知らないばかりか、知ろう

とおもう意も無いのだから、無論その女をどうしようという  
ような心は夢にも持たぬ。無かつた縁に迷いは惹かぬつもりで、  
今日に満足して平穩に日を送っている。ただ往時の感情の遺し  
た余影が太郎坊の湛える酒の上に時々浮ぶというばかりだ。で、  
おれはその後その娘を思っているというのではないが、何年後に  
なつても折節は思い出すことがあるにつけて、その往昔娘を思っ  
ていた念の深さを初めて知って、ああこんなにまで思い込んでい  
たものがよくあの時に無分別をもしなかつたことだと悦こんでみ  
たり、また、これほどに思い込んでいたものでも、無い縁は是非  
が無いで今に至つたが、天の意というものはさて測られないもの  
ではあると、なんとなく神さまにでも頼りたいような幽微な感じ

を起したりするばかりだった。お前が家へ来てからももうかれこれ十五六年になるが、おれが酒さえ飲むといえどどんな時でも必ずあの猪口で飲むでいたが、談すには及ばないことだからこのしさい仔細は談しもしなかつた。この談ははなし汝さえ知らないのだもの誰がだれ知つていよう、ただ太郎坊ばかりが、太郎坊の伝言をした時分のおれをよく知つているものだった。ところでこの太郎坊も今宵こよいを限りにこの世に無いものになつてしまった。その娘はもう二十年も昔から、存命ながらえていることやら死んでしもうたことやらも知れぬものになつてしまふ、わずかに残つていたこの太郎坊も土に歸つてしまふ。花やかで美しかった、暖かで燃え立つようだった若い時のすべての物の紀念かたみといえば、ただこの薄禿頭、お恰好の

紅絹もみのようなもの一つとなつてしもうたかとおもえば、ははははは、月日というものの働きの今更ながら強いのに感心する。人の一代というものは、思えば不思議のものじゃあ無いか。頭が禿げるまで忘れぬほどに思い込んだことも、一ツ二ツと轄くさびが脱ぬけたり輪わが脱とれたりして車が亡なくなつて行くように、だんだん消ゆるに近づくというは、はて恐ろしい月日の力だ。身にも替かえまいとまでに慕したつたり、浮世を憂ういとまでに迷つたり、無い縁は是非もないと悟つたりしたが、まだどこともなく心が惹かされていたその古い友達の太郎坊も今宵は摧くだけて亡くなれば、恋こいも起らぬ往時むかしに返つた。今の今まで太郎坊を手放さずおつたのも思えば可笑しい、その猪口を落して摧くだいてそれから種いろいろ々と昔時むかしのことを繰返して

考え出したのもいよいよ可笑しい。ハハハハ、氷を弄もてべば水を得るのみ、花の香においは虚空そらに留とどまらぬと聞いていたが、ほんとにそうだ。ハハハハ。どれどれ飯めしにしようか、長話ながわしをした。」  
と語り了おわつて、また高く笑った。今は全く顔付も冴さえざえとした平生つねの主人であつた。細君は笑いながら聞き了りて、一種の感に打たれたかのごとく首を傾けた。

「それほどまでに思つていらしたものが、一体まあどうして別れなければならぬ機会はめになつたのでしょうか、何かそれには深い仔細があつたのでしょうか。」

とは思わず口頭くちさきに迸はしつた質問で、もちろん細君が一方ひとかたならず同情を主人の身の上に寄せたからである。しかし主人はその質問

には答えなかつた。

「それを今更話したところで仕方がない。天下は広い、年月は際涯てしな無い。しかし誰一人おれが今ここで談す話を虚言うそだとも眞実ほんとだとも云い得る者があるものか、そうしてまたおれが苦しい思いをした事を善いとも悪いとも判断してくれるものが有るものか。ただ一人遺つていた太郎坊は二人の間の秘密をも悉くわしく知つていたが、それも今亡むなしくなつてしまつた。水を指さしてむかしの氷の形を語つたり、空を望んで花の香かの行衛ゆくえを説いたところで、役にも立たぬ詮議せんぎというものだ。昔時むかしを繰返して新しく言葉を費ついやしたつて何になろうか、ハハハハ、笑つてしまふに越したことは無い。云わば恋の創痕きずあとの痂かさぶたが時節到来して脱はがれたのだ。ハハハハ、大

分ぐあいいい工ぐあい合あに酒まわも廻まわった。いい、いい、いい、酒はもうたくさんだ。と云い終おこつて主人は庭を見た。一陣いちじんの風はさつと起おこつて籠かご洋らん燈プの火を瞬またたきさせた。夜の涼しさは座敷に満ちた。

(明治三十三年七月)



# 青空文庫情報

底本：「ちくま日本文学全集 幸田露伴」筑摩書房

1992（平成4）年3月20日第1刷発行

底本の親本：「現代日本文学全集」筑摩書房

入力：林 幸雄

校正：門田裕志

2002年12月5日作成

2003年7月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>)

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 太郎坊

幸田露伴

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>